



平成30年度 全国学力学習状況調査の結果について

御嵩町(組合)教育委員会



御嵩町で学ぶ児童生徒一人一人に生きる力を育む!

文部科学省は、下記の目的で、平成30年度全国学力・学習状況調査を実施した。

調査の目的 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

調査対象は、小学校6年生と中学校3年生で、調査内容は、国語、算数(数学)及び理科、質問紙調査(児童生徒対象と学校対象)である。御嵩町教育委員会は、保護者や地域住民に対して説明責任を果たすために、子どもたちの学力・学習状況について、積極的な情報提供を行うとともに、教育施策の成果と課題を検証し、学校・家庭・地域社会が協力して、その改善を図ることが重要であると考えている。そこで、町長、教育委員会、可児郡小中学校長会等で協議し、「先生や児童生徒のやる気につながる」「保護者や地域住民の協力を得る」ために、平成30年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領「調査結果の公表に関しては、教育委員会や学校が、保護者や地域住民に対して説明責任を果たすことが重要である一方、調査により測定できるのは学力の特定の一部であること、学校における教育活動の一側面であることなどを踏まえるとともに、序列化や過度な競争が生じないようにするなど教育上の効果や影響等に十分配慮することが重要である。」に基づいた公表を行う。ここに公表する内容は、各校が9月までに保護者等に向けて公表した内容の一部をまとめたものである。特に、考察・課題、改善策が重要である。各校及び御嵩町教育委員会の取組について、忌憚のないご意見をいただき、更なる教育及び教育施策の改善、各児童生徒の全般的な学習状況の改善につなげていきたい。

中学校

平均正答率による分析では、全国も岐阜県も、昨年度の結果と比較すると、国語A・B、数学Bともには1~1.0ポイント下がり、昨年度と比較して問題の難易度が上がったと言える。御嵩町全体の結果は、国語Bと理科は、全国と比較してほぼ同等、国語Aと数学A・Bは全国と比較してやや低く、昨年度の御嵩町と比較しても、数学に課題があり、個に応じた指導について、更なる対策が必要である。中央値による分析では、御嵩町全体の結果は、国語Bと理科は全国とほぼ同等で、数学A・Bは全国と比較してやや低くなっている。平均正答率と同様な分析結果である。

◆上之郷中学校

平均正答率による分析では、国語A・B、数学A・B、理科とも、全国と比較して高く、生徒の生活や学習の状況を把握し、それに即した支援を家庭の理解と協力も得ながら全校体制で進めている成果が出ている。中央値による分析では、全国と比較して、国語A、数学A・B、理科は高い状況で、上位に位置する生徒が多いことが分かる。少人数指導の成果である。

考察・課題

◇国語…全国・県平均と比較して、A・B問題ともにやや高い正答率である。全教科で、あるいは小学校から継続して「書くこと」についての場を保障してきたことで、書く意欲自体は高く、長文を書くことにも抵抗が少ない。また、「読むこと」についての設問も概ね正答率が高い。ただし、段落相互の関係をとらえたり、構成を工夫して書いたりする問題においてやや弱さが感じられ、特に、基本的なことを読み取って正しく書くという点が課題だと考えられる。

◇数学…全国・県平均値と比較して、A・B問題ともにやや高い正答率である。図形や数量に関する知識は概ね定着していると言える。ただし、A問題においては数量関係を不等式に表すこと、反比例における値の変化、相対度数が表す意味等の理解がやや弱い。また、B問題では図形の合同の証明手順、文字を使った式の説明等に弱さが見られる。総じて、問題文が長い時に正しく読み取ることができていない。

◇理科…全校・県平均値と比較して、正答率は高く、どの領域もかなり上回っており、基本的な力は概ね身に着いていると言える。4分野では、物理領域の正答率が高く、地学領域の正答率が低い。(ただし、全国平均はかなり上回っている。)評価の観点では、自然事象への関心・意欲・態度・観察・実験の技能、自然事象についての知識・理解についての正答率が高いが、科学的な思考・表現の正答率が若干低い。植物を入れた容器の中の湿度が高くなる蒸散以外の原因を指摘したり、シミュレーションの結果について考察した内容を検討して改善し、台風の進路を決める条件を指摘したりする問題の定着度が低い。

改善策

○《読む・書く・話す力を養う指導…国語科を中心として》読解力を高めるために、着目すべき視点を例示したり、交流で考えを深めたりできるようにする。作文や要約の練習など書く機会や練習を意図的に設定し、書くことへの抵抗感を取り除く。さらに、キーワードを使い、構成を考えて書いたり、目的意識をもってまとめを書いたりすることで工夫した表現ができるようにする。

- 《知識・技能の定着を図り、思考・表現する力の向上を図る指導…数学科を中心として》復習を授業内に位置付け、用語や性質などの“学び直し”を行う。反復練習を取り入れ、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。単位時間内の終末に練習問題の時間を確保し、やりきらせることで課題解決の見届けを確実に進行。
- 《知識の活用・一般化の意識を高める…理科において》日常生活との関連を図り、科学的に思考したり、表現する資質・能力を身につけさせたりする。また、課題を見出し、問題解決の知識・技能を活用する場を創り出す。
- 《学習過程ごとの見届けの明確化と個を高める指導・援助の具体化…全教科で実践》本時の学習課題と学習のまとめを板書に位置づけ、「実態」「学習活動」「定着」をそれぞれの学習過程で見届ける。課題解決に到達している生徒には、更に力を伸ばしたり意欲を高めたりする指導・援助を行う。(問い返し、意図的指名、発展問題)

◆向陽中学校

平均正答率による分析では、国語B、数学B、理科は、全国と比較してほぼ同等、国語A、数学Aは、全国と比較してやや低くなっているが、昨年度よりB問題が向上していることは、個に応じた指導の成果であるが、更なる指導が必要である。中央値による分析では、全国と比較して、国語A・B、数学A・B、理科ともにやや低い状況。低位の生徒に対する、基礎的な学習に関して、更なる指導が必要である。

考察・課題

◇国語は、小6時(平成27年度調査)と比較し、多くの領域や観点で改善があった。特に国語A・Bとも「読むこと」領域が改善し、基礎的な文章を読み取る力が向上している。「読むこと」領域は、小6時と比較し始めた平成28年度以降、毎年同様の結果が出ている。中学入学時より毎日実施してきた朝読書の成果と考える。「話すこと・聞くこと」領域は、全国平均並の結果であった。昨年度より学習指導部を中心として全教科共通で取り組んできた成果と考える。

◇数学は、小6時と比較し、数学Bの「図形」領域で大きく改善している。この領域については県・全国平均並であった。昨年度の課題として明らかになった「数と式」領域は、数学Aでは小6時と同等、数学Bでは小6時と比較して大きく改善していた。観点「数学的な見方や考え方」は、小6時と比較し大きく改善している。

◇理科は、小6時と比較し、どの領域・観点においても大きく伸びがあった。特に、事象に対する考えや科学的な言葉を使って記述する力が大きく伸びていた。

◇質問紙では、平成28年度からの3カ年を比較して、「自分にはよいところがある」「先生は自分のよいところを認めてくれている」「将来の夢をもっている」「人の役に立つ人間になりたい」と感じている生徒が、年々増加してきている。「学校の規則を守っている」「いじめは、どんなことがあってもいけないことだと思う」は、県・全国平均を上回っている。自己肯定感や自己有用感、規範意識を高める指導を意図的に行ってきたことで、生徒が安心して学習・生活できる環境が整ってきた。

改善策

○各授業において生徒の「導入時の実態」「学習状況」「学習の定着状況」を見届け、指導・援助を行う。見届けによって把握した実態を基に、次時の授業の具体的な指導・援助を用意する。また、生徒が互いに考えの説明をし合ったり、こつを教えたり確認したりする学び合いの場を意図的に位置付けることで、より深い学びができるようにする。教科の特性により、習熟度別少人数指導(数学)やティーム・ティーチング(英語)、補助教員による個別支援(主に技能教科)などを行い、指導・援助の充実を図る。○国語では、漢字に取り組む時間(毎授業5分間)を確保し、週末には漢字テストを実施することで、漢字の定着を図る取組を継続していく。また、授業開始2分前に音読を行ったり、授業終末ではキーワードを使ったまとめを行ったりすることで、学習内容の定着や話す力・書く力の強化を図る取組も継続していく。朝読書も、継続していく。○数学では、授業開始2分前から計算を中心に練習問題を行い、解き方を丁寧に解説する取組を継続していく。授業後半では評価問題を出題し、確実に問題を解けているかを見届け、指導・援助を行ったり発展問題を渡したりして力を付けさせていくことも継続していく。また、宿題を毎時間出し、教科担任がやりきれていることを見届けることも継続していく。○理科では、化学変化をモデルで説明できるよう、2年生「化学変化と原子・分子」において、単元を通して原子モデルを用いて説明する場を設定し、より多くの経験を積ませていく。また、授業終末で学習内容から生まれた新たな疑問点を交流する場を設け、生徒の多様な疑問を受け入れつつ、次時の課題に結び付けるなど、主体的に探究を深めるよう助言していく。○学年・学級では、多くの生徒が家庭学習に取り組む習慣を身に付けつつあるものの、家庭学習の方法が確立していない生徒や、知識・技能を身に付けるためには学習量が不十分な生徒がいる。そのような生徒には、家庭学習のやり方や内容を具体的に提示し見届け、学習の内容や量の充実を図っていく。

◆共和中学校

平均正答率による分析では、国語A・B、数学A・B、理科とも、全国と比較してやや低く、昨年と比較すると数学A以外は正答率が下がっている。理科は前回(平成27年度)の正答率よりやや上がっている。該当学年では、より確実に学力の定着に向けた指導が必要である。中央値による分析では、全国と比較して、理科はほぼ同等、国語A・B、数学A・Bでは、やや低い状況であった。特に数学では低位の生徒が多く、底上げが重要である。

考察・課題

◇国語では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のどの領域でも全国の正答率よりもやや低い結果であった。文章を読んで、段落が文章全体の中で果たす役割を考えて全体を理解する力や、目的に応じて文章を読み、内容を整理して自分の考えを書く力は比較的良好に身に付いている。漢字を読む能力に比べて、書く能力に弱さが見られる。スピーチに対する感想や話し合いのメモを分析する問題の正答率が低いことから、文章や対話の概要だけでなく、話し手や書き手の意図を適切に理解する能力に課題があると考えられる。◇数学では、多くの問題で全国の正答率を下回り、数学A・Bの両方で問題の半数が全国の正答率よりも10%以上低い結果であったが、図形の性質についての知識は比

較的よく身に付いている。しかし、合同条件や絶対値といった基礎的な概念の理解ができていない生徒が多く、特に「数と式」については、代入や連立方程式など、基本的な計算問題で正答率が著しく低く、弱さが見られる。◇理科では、自然事象への関心・意欲・態度が全国より13%高く、理科に興味がある生徒が多い。比較的化学分野の定着が強く、生物分野での弱さが見られた。授業で実験を多く行っていることが関心・意欲の向上につながっていると思われる。知識・理解は比較的定着しているが、それを活用する力に課題が見られる。◇生徒質問紙の回答から、多くの生徒が自己有用感をもち、教師等他の人たちから認められていると感じている。また、学校の規則を守ったり家庭での規則正しい生活に心がけたりすることに意識の高さが見られ、地域の行事やボランティアに参加することに価値を感じる生徒が多くいる。他人のために働きたいという思いが強い一方で、具体的な将来の見通しがもてていない生徒が少なくない。授業の楽しさや大切さを理解している反面、家庭での宿題や予習復習に意欲的・計画的に取り組むことができないと感じている生徒が多い。学習内容の確実な定着に向けて、学習方法にかかわるより丁寧な指導が必要である。

改善策

○国語では、これまでの学習プリントやテキストを用いた漢字学習に加えて、それぞれの語句の多様な使用方法についても指導し、言葉を活用する能力を高める。文章の読み取りを通して、基本的な表現技法についての知識や書き手の意向を理解する力を身に付けるだけでなく、学んだ内容を自己表現に生かす活動まで発展させていく。朝読書や全校読書等の読書指導を通して読む力を伸ばすとともに、感想文の交流まで発展させることで、読解力や表現力の向上を図る。

○数学では、基礎的・基本的な知識・技能をより確実に定着できるよう、同様の問題の反復を大切に授業展開を工夫する。数学的用語をキーワードとして文章でまとめる活動を位置付け、表現力を高める。生徒の実態を把握し、スモールステップで問題に取り組むことができるように工夫する。また、表や図等の視覚的な教材を多く活用し、生徒の理解を助ける。

○理科では、思考・表現の力を伸ばすために、教師主体の学習活動を減らし、ペア交流や班での話し合い等の生徒が自分の考えを表現する活動を増やす。各単位時間の課題解決を進める学習を通して、生徒が自ら課題解決する手順を身に付けられるように指導する。また、課題解決から新たな疑問を生み出し、次の課題につなげられるようなサイクルを意識して授業を仕組む。

○全教科を通して、授業の序盤に、前時の既習事項の確認や基礎的な学習内容が身に付いているかを見届けるための「スキルアップ活動」の実施を徹底する。「スキルアップテスト」や単元テストを通して、基礎学力の向上を図るとともに、できなかった問題ができるようになるまで確実な見届けを行う。授業と家庭学習の連携を図り、具体的な学習方法について、より丁寧に指導する。「学習の振り返り」カードを活用し、その日の各授業で身に付けた学習内容は何かを帰りの会で生徒自らが振り返ることで、より確実な定着と家庭学習の見通しをもてるようにする。キャリア教育を通して、生徒が将来への希望をもつことで具体的な進路設計を促し、学習への意欲を高められるようにする。

小学校

平均正答率による分析では、全国も岐阜県も、昨年度の結果と比較すると、国語A・Bは2～3ポイント下がり、昨年度と比較して難易度がやや上がっている。算数Aは10ポイント以上低く、難易度が上がっていた。算数Bは5ポイント以上上がり、難易度が下がったと言える。御嵩町全体の結果は、国語Aは全国と比較して高く、国語B、算数A・Bとも、全国と比較してほぼ同等で、昨年度と比較して向上している。理科もほぼ同等であった。中央値による分析では、御嵩町全体の結果は、国語Aは全国と同等、国語Bは全国よりやや低く、算数A・B、理科は全国と同等であった。

◆上之郷小学校

平均正答率による分析では、国語A・B、算数A、Bともに、全国と比較して高く、昨年度と比較しても、全体的に正答率が上がっている。理科も高い。個に応じたきめ細かな指導の成果といえる。中央値による分析では、全国と比較して国語Bは同等、国語A、算数A・B、理科は高い状況で、上位に位置する児童が多いことが分かる。少人数指導の成果である。

考察・課題

◇国語では、自分が伝えたいことについて筋道を立てて話す問題、慣用句の意味を理解し使う問題、話し合いの参加者として質問の意図を捉える問題の正答率が高い。しかし、漢字を文の中で正しく使う問題、主語と述語との関係などに注意して文を正しく書く問題、目的に応じ詳しく書く問題の正答率がやや低い。

◇算数では、込み具合を比べる問題、数量関係を理解し数直線上に表す問題、合同な正三角形で敷き詰められた模様の中に条件に合う図形を見出す問題の正答率が高い。しかし、 180° よりも大きい角の大きさを求める問題、グラフから読み取ることができることを適切に判断する問題、規則性を基に条件に合うものを判断する問題の正答率がやや低い。

◇理科では、野鳥のひなを観察する方法についての問題、ろ過の適切な方法についての問題の正答率が高い。しかし、実験結果を基に分析して考察し記述する問題の正答率がやや低い。

◇将来の夢や目標を持ち、地域・社会への関心が高いが、自尊感情・規範意識がやや低い。学校の宿題はしているが、自分で計画を立てて勉強することに弱さが見られる。

改善策

○国語では、授業で学習したポイントを生かした日記作文指導を継続する。長い文章を正しく読めるようにするために、物語文では主人公の心情を表す言葉に、説明文では作者が伝えたいことに着目してノートにまとめる。推薦図書を全児童が読破する。

○算数では、問題文から分かっていること、求めたいことが言えるようにする。解答を求める手順をノートに書いたり、説明し合ったりする場を設定する。スキル・計算大会の取組を通して、計算力を高める。

- 理科では、実験結果を基に根拠を明確にして、自分の考えをノートに書けるようにする。
- 生活習慣チェック・ノーメディアの取組を通して、自分の生活を見直し、規則正しい生活ができるようにする。メディアとの接し方を考えさせる場を設ける。高学年では、自主学習を行い、自分で決めた学習に取り組ませる機会を作る。

◆御嵩小学校

平均正答率による分析では、国語A・国語B、算数A・算数B、理科のいずれも、全国・県と比較してほぼ同等である。中央値による分析では、全国と比較して、国語Aは同等、国語B、算数A・算数B、理科はいずれもやや低い。いずれの教科も下位の児童に対する基礎的・基本的な学習内容の定着を図るための継続的な指導が必要である。

考察・課題

- ◇国語では、特に、「書く」領域に弱さが見られ、B問題の選択式で無解答率が高い。ただし、記述式においては全国や県と比較して無解答率が非常に低く、最後まで解答を書こうと取り組む姿が見られた。自分の意見と比べて考えをまとめたり内容の中心を明確にして詳しく書いたりすることに弱さが見られることから、問題の意図に沿って文章を書く等、「書くこと」の領域における学習の充実を図る必要がある。
- ◇算数では、全般的に全国・県と同じ傾向である。昨年、一昨年と比べると正答率が下がっており、A問題の「量と測定」「数量関係」、B問題の「図形」領域で、全国や県よりもやや低い。また、B問題記述式では無解答率が高く、5問中4問において1割以上無解答で、中には2割弱にのぼるものもある。正答数分布図からは、A問題もB問題も中央値をはさんで上下に割合が高くなっていることから、二極化の傾向が見られる。
- ◇理科では、「知識」に関する問題の正答率は全国・県とほぼ同様であるが、「活用」に関する問題の正答率が低い。領域別で見ると、「物質」領域の問題の正答率は全国・県とほぼ同様であるが、それ以外の領域がやや低く、予想から得られる結果を見通してどのような実験をしたらよいか考える力が弱い。また、実験結果から言える結論を記述する問題では、無解答率が高かった。正答数分布図からは、中央値をはさんで上下に割合が高くなっていることから、理科も二極化の傾向が見られる。
- ◇家庭では、ほぼ規則正しい生活ができていると言える。また、家の人も学校での出来事を話していて、会話があると言える。また、『自分にはよいところがある』と思っている児童も昨年度よりかなり多く、先生も認めてくれていると思っている割合が全国・県と比べて高い。5年生のときから、学年同一歩調で児童のよいところを認め、励ましながら様々な活動に取り組んできた結果であると言える。宿題に関しては全児童がしていると回答しており全国・県を上回っているが、学校の授業の予習・復習に関しては全国・県よりも下回っている。読書時間は、2時間以上の割合が、全国・県よりもかなり高く、読書好きの児童が多い。算数に関しては、新しい問題に出合ったときに解いてみたいと思う割合は全国・県より低く、さらに、解き方がわからないときには、諦めずにいろいろな方法を考える割合が全国・県よりも低かった。このことから、新しい問題に出会っても、問題を見てわからないと思うと諦めてしまう傾向が強いと言える。そのため、算数のB問題記述式では無解答率が高いと考えられる。

改善策

○学力の二極化がうかがわれ、下位の児童の引き上げだけでなく、中位の児童へのでこ入れが必要であると思われる。問題をじっくりと最後まで読み、問題の意図を理解して問われていることを確実に解答するなど、解答の仕方を指導する必要がある。また、国語A問題のように、12問中1問だけまちがえた児童の割合が最も高かったことから、点をとりにくく見直しの仕方の指導も大切にする。○国語の「書くこと」領域の学習の充実に向けて、社会科、理科、総合的な学習の「新聞づくり」やまとめの文を書く指導の際に、視点をもたせて書かせたり、効果的な構成の在り方について指導をしたりする。また、自分の考えや思いを文章で書く学習活動を位置づけるとともに、読書感想文の指導にも力を入れていく。日記にテーマを与え、よりよい表現を考えて書く習慣を身に付けさせるなど、日常的に書く活動を取り入れていく。○算数においては、基礎的・基本的な内容でつまづいている児童が多かった。つまづいている部分を正確に把握し、授業の中で復習の時間をとったり、家庭学習や朝学習で練習問題に取り組んだりする等、くり返し学習させることで定着を図る。○理科では、実験結果から言える結論を記述する問題においての無解答率が高かった。予想を立ててどのような実験を行うのかを考え、その実験の結果をグラフや図、文章に表す活動を通して、考察をする学習をくり返し体験させていく。

◆伏見小学校

平均正答率による分析では、国語Aは全国と比較して高く、国語B、算数A・B、理科ともに、全国とほぼ同等である。昨年度と比較して、大きく向上している。個に応じた指導や校内研究の成果である。中央値による分析では、全国と比較して、国語Aは高く、国語Bはやや低く、算数A・B、理科は、同等である。下位の児童に対する基礎的・基本的な学習内容の定着を図るとともに、上位の児童を活躍させ、仲間と学び合う学習を組織することの成果が出ている。

考察・課題

- ◇国語では、文の中における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書き直す問題や、相手や場面に応じた適切な敬語を選択する問題や、目的や意図に応じて、文章全体の構成の効果を考える問題などでは、平均正答率を上回っている。書かれている内容や文の意味を理解し、既習の漢字を正しく選択する問題やでは正答率が低い。選択肢で答える問題は、比較的正答率が高いが、目的に応じて文章の内容を的確に押さえ、条件に合わせて考えて書く問題では、正答率が低い。
- ◇算数では、1に当たる大きさを求める問題場面における数量関係を理解し数直線上に表す問題、小数の除法の意味や円周率を求める式を問う問題、敷き詰め模様の中から条件に合う図形を見いだす問題、示された情報を解釈し条件に合う時間を求める問題では、正答率が高い。単位量当たりの大きさを求める除法の式と商の意味を問う問題や、円の直径

の長さや円周の長さの関係を問う問題、設問に対して示された数量を関連付け根拠を明確にして記述する問題では、正答率が低い。

◇理科では、安全に留意し、生物を愛護する態度で野鳥のひなを観察する方法を構想する問題では、全国平均正答が高いが、物を水に溶かしても全体の重さは変わらないことを、食塩を溶かして体積が増えた食塩水に適用できるかどうかを見る問題では、正答率が低い。

改善策

○国語では、授業の終末等で、自分の考えやまとめを指定された文字数で記述する活動を取り入れていく。

漢字を正しく読み、正しく書き、文や文章の中で使おうとする習慣を身につけさせるために、各教科等の学習でも意識させ、既習の漢字の復習にも力を入れていく。読書指導の中で、読書で終わることなく、作品に描かれた人物の行動や生き方と、自分の経験や考えなどの共通点や相違点を見つけ、自分の考えをまとめる活動等を意図的に取り入れていく。

○算数では、円の直径の長さや円周の長さの関係を調べる学習では、実際に幾つかの円について、直径の長さや円周の長さを測定する活動を重視するなど、机上だけで終わらない学習を大切にしていける。日常生活の問題解決のための方法を、数学的に記述する問題では、無回答が全体の25%であった。自分の考えを分かりやすく表現する力を伸ばし、あきらめないで問題に取り組む意欲を培っていくことができるよう、日常の学習の中でも、自分の考えを書く場面を大切にしていける。

○理科では、4年生の学習内容について、正答とならなかった児童が目立つ。既習の内容について、関連のある単元の学習に合わせて、意図的に復習し、理解の定着を図っていくようにする。実験を通して導き出した結論を記述する問題では、無回答が全体の12.5%であった。理科の学習でも、自分の考えを適切に表現する力を伸ばし、あきらめないで問題に取り組むことができるように指導していく。

御嵩町教育委員会の取組

御嵩町学力向上推進事業等について

1 小中連携・中学校ぐるみの学力向上の取組

確かな学力を育むため、平成22年度から「御嵩町学力向上推進事業」として、小中連携・中学校ぐるみの学力向上に取り組んできた。校区の小中交流会は年3回(春・夏・秋)開催し、教職員や児童生徒の交流が深められ、平成25年度より、秋の交流会の内、指定した校区の交流会に御嵩町全教職員が参加し、御嵩町全体の取組となるよう、実践内容の共通理解を図るようにした。下記の内容で取り組んでいる。

1 事業のスローガン…「楽しいな 分かったよ できたよ」 高まる子ども みんなの力で

2 事業の目的…自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決していくための資質や能力を身につけさせ、確かな学力・豊かな心・健やかな体を育む。→ 一人一人に「生きる力」を育む。

3 事業の「学力」とは…教科で身につけさせたい力(知)に限らず、社会性(徳)の育成や健康な生活づくり(体)の面等、人としての向上的変容を生み出す力に基本を置く。

4 事業のスローガン「みんなの力で」の4観点

(1) 学 校……授業改善 生きる力を育み、確かな学力を身に付けさせるための「授業改善」の推進

①授業改善のポイント ・実態把握やつまずきの要因分析 ・指導改善サイクルを生かした実践 ・個に応じたきめ細かな指導 ・「主体的・対話的で深い学び」による授業改善 ・「3つの見届ける」を通じた学習内容の定着 ・学校におけるカリキュラム・マネジメントの充実(児童生徒一人一人に生きる力を育む 地域に開かれた教育課程づくりの取組)

・小学校の教科担任制の実施、小中兼務の活用等

②自ら学び自ら考える力の育成と確かな学力の定着を目指す主題研究の充実 ・教科指導、環境教育、人権教育(道徳教育、特別活動、生徒指導)、健康教育、防災教育、食育等

③望ましい学習(学級)集団の育成 ・学習規律の確立 ・学び方指導の徹底等 ・学び合いの質が高まる学習集団の育成

④教職員自らの資質向上を目指す自己研修の充実 ・教科の本質に立った教材研究 ・自ら進んで問題を見つけ解決する授業改善 ・存在感や所属感を高める学級経営 ・望ましい校内環境づくり等 ・小中連携による研修

(2) 校種連携……幼保小中高を見通した教育 幼保小中高の連携や積み上げ、接続を大切に、幼保小中高を見通した教育の構築

①幼保小中高の教育目標のかかわりの明確化と教育目標の更なる具現化 ②小中の教科、道徳、特別活動等の指導内容の系統性と一貫性の確認 ③校区の学習指導・生徒指導上の共通実践内容と発達段階に応じた指導内容と指導方法の明確化

④校区の道徳教育の重点内容項目の共通化と共通実践の明確化 ◆共通実践(例) 挨拶・掃除・仲間・安全

⑤幼保小中高の実践交流及び園児・児童・生徒との活動交流の活発化

(3) 家庭・地域連携…家庭・地域の教育力活用 家庭や地域との連携を深め、それぞれの教育力を生かし、活用する教育の構築

①地域の施設や豊かな自然を活用した教育活動の推進…中山道みたけ館、みたけの森、公民館、名鉄広見線、可児川等

②幅広い知識や経験を持つ地域の人材を指導者として招聘する教育活動の推進…地域の方々から知識、技術、社会性、道徳性等生き方を学ぶ ◆ふるさとふれあい等づく事業の推進 ③地域の行事等への積極的な参加・呼びかけ及び学校行事等の情報発信 ④望ましい生活習慣の確立…時間や食に対する意識の高揚、規範意識(情報モラル)の高揚 ⑤真の学力を伸ばす基盤となる家庭での生活づくり、生活改善、家庭学習、一家庭一実践等◆PTA活動の充実◆家庭教育学級の活性化

(4) 児童生徒………自治活動の推進 学力の向上のために、児童生徒が自主的・自治的に取り組む活動の推進

①学校 ・学級での係活動 ・児童会・生徒会活動 ・各委員会活動 ②校種連携 ・児童会・生徒会等がタイアップして行う活動 ③家庭・地域連携 ・児童会・生徒会等が家庭・地域に働きかける活動

2 「学校におけるカリキュラム・マネジメント充実事業」の取組

児童生徒一人一人に生きる力を育む 地域に開かれた教育課程づくり ～地域とともにある学校づくりを基盤として～

(1) 2030年を見通した資質・能力

オックスフォード大学のマイケル・オズボーン氏による「2030年は、仕事の半数はAIで代替。」ニューヨーク市立大学のキャシー・デビットソン氏による「小学生の65%は将来、今は存在していない職業に就く。」等々、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的にも変化させつつある。社会の変化は加速度を増し、児童生徒の生き方にも影響を与えている。このような時代だからこそ、次の資質・能力の3点が重要になってくる。

- ①何を理解しているか、何ができるか…社会の中で生きて働く「知識・技能」の習得
- ②理解していること・できることをどう使うか…未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
- ③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか…学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養

(2) 資質・能力を育むために

これらの資質・能力を育んでいくためには、次の①～⑥に関わる事項を各学校が組み立て、家庭・地域と連携・協働しながら実施し、目の前の児童生徒の姿を踏まえながら不断の見直しを図ることが求められる。

- ①何ができるようになるか…育成を目指す資質・能力
- ②何を学ぶか…教科等を学ぶ意義と、教科等・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成
- ③どのように学ぶか…教科等の指導計画の作成と実施、学習指導の改善・充実
- ④児童生徒一人一人の発達をどのように支援するか…児童生徒の発達を踏まえた指導
- ⑤何が身に付いたか…学習評価の充実
- ⑥実施するために何が必要か…地域に開かれた教育課程を実現するために必要な方策

(3) 御嵩町が取り組む2年間の研究

前述を基盤として、今年度から2年間、岐阜県教育委員会の指定を受け「学校におけるカリキュラム・マネジメント充実事業」に取り組む。研究主題は「児童生徒一人一人に生きる力を育む 地域に開かれた教育課程づくり～地域とともにある学校づくりを基盤として～」で、研究内容は以下の3点である。

- ①地域に開かれた教育課程づくり…よりよい学校教育を通じてよりよい地域を創るという目標を持つ。地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりする。全教職員が地域に開かれた教育課程づくりの必要性を理解し「私の教育課程づくり」に取り組み、「我が校の教育課程づくり」につなげていく。
- ②地域に開かれた教育課程の実施状況に基づくPDCAサイクルの確立…児童生徒の姿や地域の現状等に関する調査、各種データ等に基づいて実施し、PDCAサイクルを確立。
- ③地域とともにある学校づくり…保護者や地域住民が学校運営に参画する学校運営協議会制度により、地域の力を学校運営に生かす。コミュニティ・スクールを全小中学校に広げる。小・中学校が互いに情報交換し、交流することを通じ、小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す。各中学校区で小中一貫教育を目指し、教職員の兼務を推奨する。

(4) 指定校、協力校及び研究組織

上之郷中学校を指定校とする。指定校は、指定の趣旨を踏まえ、研究推進委員会を中心に主題研を設定・推進する。年度末には成果と課題を明確にして、県内に実践研究を広める。

上之郷小、御嵩小、向陽中、伏見小、共和中を協力校とし、主題研の中で、学力向上の基盤となる取組や地域社会に開かれた教育課程づくりを洗い出し、指定校の研究に協力する。

御嵩町全体の推進組織としては、御嵩町学力向上推進事業の組織を活用する。御嵩町全教職員の支援と協力により、研究を推進していく。

(5) 御嵩町全体の推進組織図

